家庭・職場・地域で子育てをサポートしよう

子育て支援 家庭編

ひとりの女性が生涯に産む子どもの数を表す合計特殊出生率は、2005年に1.25を記録し波紋を広げています。

この進行する少子化対策の鍵のひとつには「母親の育児負担を軽減し、安心して生み育てることができる社会を実現することである」とあげられています。また、2003年厚生労働省全国家庭動向調査によると、夫の育児遂行率が高いと第1子出産時の妻の就業継続率も高く、現在の平均子ども数も追加予定の子ども数も多い傾向が見られました。

各家庭が妻（母親）の負担を少しでも軽減させるために、夫（父親）の家事・育児参加をどのようにして促進するかが最大の課題となっています。そのため、「ワーク・ライフ・バランス」（仕事と生活の調和）の考え方を広く職場や地域に浸透させ、男性の働き方を見直す必要があります。

今号では、「平成17年度県民子育て支援大賞」（カップル部門※）で優秀賞を受賞したいわき市の3組の受賞者と現在、育児休業を取得し「主夫業」を行っている事例を紹介します。

※福島県が、子育て支援の参考としていただき、地域全体で子育て支援の輪を広げていくため、地域や家庭などで行われている、身近な子育て支援の取組みを個人・団体・カップル部門の3部門に分けて募集したもの。

子育てを楽しむ夫が頼もしい

安島　直美さん・司さん夫妻

応募の動機は、私が夫への感謝の気持ちを表現したかったからです。仕事とのバランスをうまくとりながら、二人の子どもたちの「今、一瞬」を楽しもうとしている夫の姿は、とても頼もしく尊敬できます。

男性が育児に関わるのは、社会的に肩身が狭いような感覚が依然ありますが、夫は出来うる範囲で仕事の質を落とさず手抜きせずに保育園の送迎・お風呂・寝る前の読書などをしています。

私もフルタイムで勤務しているので、時間の余裕がないのは事実ですが、二世帯同居ということもあり、多くの家族に支えられて過ごしています。

何でもポジティブにとらえながら子どもたちが過ごす未来が明るく優しくあり、伸び伸びと過ごせる環境であることを願っています。

夫婦で話し合いながら子育て

加藤　典子さん・信さん夫妻

応募の動機は、乳幼児をもつ核家族の専業主婦と夫が子育てを抱え込まざるを得ない状況を知ってほしかったからです。

夫は、子どもが生まれて私が忙しくなると少しずつ手をかしてくれるようになりました。私が授乳している間に寂しがる上の子と遊んだり、家事をしたり。娘には、家事をするパパのお手伝いも遊びと同じように楽しく感じるようです。

しかし、父親が子育てしようとするとき、会社に育児支援制度があっても周囲の理解が得られない、男性用トイレにオムツ換えシートがないなど、環境がまだ整っていないと感じます。

夫の協力があり自分の時間を持つことができるので、二人目の産後から資格の勉強を始め、9か月のときに取得することができました。

育児番組や雑誌も二人で目をとおし、子どもにとって何がいいか、夫婦で話し合い、同じ方向を向いて子育てをしています。

子ども時代を思いっきりパパと遊んでほしい

武田　京子さん・一浩さん夫妻

応募の動機は、夫が子どもとどんなに楽しく過ごしているかを知ってほしかったからです。

普段、私が外で働き、夫が家事をしていますが、子育てについては、夫は自分も子どもも楽しく過ごすことを重視し、とくに子育てという気負いはありません。

父親が子育てをすることに職場や地域の理解が得られにくいということも多少あるかもしれませんが、協力して子育てする必要に迫られたら、そんなことは気になりません。

私は仕事が忙しくてあまり一緒にいられませんが、子ども時代を思いっきり、パパや友達と遊んで充実した時間を過ごしてほしいと願っています。